

# つまりは、はまってたのかも

高山 宏\*

六十歳で明大に御世話になり、六年いて一区切りつけられたかなということで、他の大学に移籍することになりました。一緒に勉強してきた学生達の幾つかのバンドが集まって六十六歳誕生日と移籍を「記念」してヘヴィメタのコンサート「学魔ナイト」をライヴハウスでやってくれました。辞めることについてはこれ以外一切何もしない、何も書かない積りでいるので、明大図書館のことを書けと頼まれるとどうしても移籍にふれざるを得ないわけですし、躊躇あり、お断りしたのですが、分量もべ切りさえも自由ということで是非是非と言われて、結局この一文をしたためております。

明大図書館の思い出とか、思い入れとかと言われているのですが、思い出は全然ありません。本好きということではほとんどレジェンドと称せそうな（自称ですら）高山ですが、和泉に五年、中野に一年いて明大図書館に足一歩踏み入れたことがありません。本を沢山寄贈する習慣があるので、入口のターンパイクの所までは入って、中から手を伸べる受け付けその他の方に本を渡すのですが、調べものがある中に入るとか、一寸辞書をばらばらとかということすら一度もありません。これはこれで誰も信じない、奇人変人ならではの依怙地かもしれませんね。しかし、もう一方の思い出ということでは少しは書けるかもしれない。それで筆をとりました。

\*

---

\*たかやま・ひろし／明治大学 国際日本学部教授

図書館にもうだれが入るかという奇妙な決心は明大とは何の関係もありません。明大に呼んでいただく前には随分いくつかの大学に奉職していました。そのうちのひとつの大学では、ぼくが御世話になった文学部に大学全体の総合図書館とは別に文学部の図書館を持っていて、これが学部建物の内部にありましたから、雨が降る日でも傘の御世話にもならず、実に自由に本の貸し、戻しができました。英独仏各学科には、但し日本語の本は入れぬという暗黙の了解があったので、日本語の本は総合図書館の方に行ってみるしかないのです。そうやって利用しているうち、検索他かなりコンピュータ化される日が来て、ほとんど失明同然の上、機械大嫌いのぼくはある日、カウンターの係に機械検索と細かい字の書類記入を頼んだところ、見たところ自分の勝手な本を読み耽っていたその男が「やりません。自分でやって下さい。そういうことになっています」とニベもない。いつもだったら別のやり方もあるでしょうが、一年に二冊か三冊かの貸し出しだし、なにしろ目が不自由なのでね、とかとか言ってみたが、ルールですので、機械だって簡単ですよと仰有る。だから、簡単なんだったら是非お願いしますよ、ダメ、これはルールなんです、そちらさんにだけといったら、例外を認めたことになる……。いろいろあつて図書館事務サイドで「神」と呼ばれていたぼく、面白がって飲み仲間でもあった図書館長をカウンターに呼び出して一件「落着」(?！)

図書のことなど一切知らないアルバイト学生でした。カウンターで目も当てられないくらい恐縮している若者が少し気の毒でした。いつもアロハしか着ないぼく、まさか本当に古株の教員とは思わなかったとか、もぐもぐ言っていました。青年の言い分には明らかに一理あるわけですが、その日を限りにぼくはその大学の総合図書館の館内に一步も入らなくなりました。

本好きだから図書委員をとというのは間違いです。基本、予算のこと、それも当てがわれた予算案に「ウン」と言うだけの仕事で、一番意味のありそうな統一的選書ということにはほとんど係わりがない。教員から選ばれた図書委員はそれでも何となく本好きの人がという感じでしたが、それと対い合う事務側が、要するに汚職防止の重大令の下に、いろいろな職場から順列組合せの交代でくるものだから、仲々寒々しいことになるわけです。

つとめた多くの大学の総合図書館に図書館司書がいないのが、ぼくにはショックでした。昔、東大駒場外国語科助手を二年つとめたのですが、折角大学院を出たのに要するにお茶汲み、コピーどりでは勿体ないと思い、五万数千冊の所蔵数を誇る一研究室書庫の全書籍のリファレンス・カードをつくったことがあります。そのせいでその五万冊については何から何まで一応は紹介できる「新型」助手が一人うまれました。ま、リファレンス・カードくらい、コンピュータがおいおいやれば良いという話にもなりそうですが、とにかくその書庫を本格機能させるに司書は必須です。本の専門家です。公立図書館に司書が少なすぎるのをかねがね怒っていて、明大図書館は何しろ林達夫、小野二郎という人文系の本狂いの蟠居せる地ではないか、さぞかし凄い名物司書がいるのであらうと思って来てみたら、いわばヴォランティア精神で、健康ぎりぎりの感じでつくしていただいている少数の人達の覚悟と誇りで動いている所と知れて正直愕然としたことです。ここ何とかしませんかねえ。電子ジャーナルの買い方、というか予算の食い方にも知恵がないなあ。専門職、とりわけ図書を仕切るというこの絶対的な専門職だけは何年かごとにグルグル人を回すというの、止めにしませんか。

ちなみにぼく、司書まがいの自己研修を繰り返していた頃、欧米への照会や注文に「ライブラリアン・タカヤマ」の名を書いておりますが、向うからの返事の多くが「プロフェッサー・タカヤマ」宛てになっていて、図書館中枢に対する彼我的評価のちがいの大きさにびっくりしたことです。

＊

先ほど話題にした大学の総合図書館、文学部図書館には、三十有余年に及ぶ勤続ということで一万冊を越える洋和書を個人寄贈しました。個人研究室に私蔵（死蔵？）の一万冊は老耄の身、ひたすら引越しが苦で、英文科は勿論、哲学科を中心に近隣の各研究室に大半を配って、軽い体で明大に参りました。明大各研究室へのあいさつ代りに配れば良かったでしょうかね。記念に『オックスフォード英語大辞典（OED）』第二版を一セット置いていきます。使いなれると、これはこれでひとつ小さな図書館のような大辞典です。愛用してやってください。国際日本学部が気の利いた英会話学校以上のものになろうとすれば『OED』の熟知が教員にも、学生にも必

要と信じての、プレゼントです。

明大の国際日本学部と聞いて首をひねりました。そういう感じの不思議な明大入りでした。六年いて自分なりに「国際日本学」というカテゴリなり、イメージなり、少しはできてきて、それを留学生に英語で授業できるところ迄は来たのですが、この新学部・新大学院の「完成年度」迄は付き合ったという気分を外へ出て行こうとして、自分ではどうにもならぬ異和感がやっぱりあったのだなと改めて思うのは、どの本を寄贈していけば国際日本学部の将来の役に立つものか、ほとんど見当がつかないからです。あって当然と思って学生達に図書館で借りて読めと言った本の過半が「先生、図書館にありませんでした」という返事。仕方なくそういう本のエッセンスをコラージュ状にコピペ(?)した fotocopy の「にわか教科書」をつくって教室で配るやり方で、いやはや千枚五千元也のコピーカードを買うこと、買うこと! その種の学生用必読書を、月々の新刊書と混ぜて毎月十冊くらいずつ寄付した感じですね。それでも六年で五百冊程度でしょうか。

図書委員に統一的選書の任を、みたいに書きました。人選のバランスとか、またうるさいことを言う人がいそうですが、一定時期、最低レベルには整った書庫をつくるには、メンバー銘々が勝手に買った残りでどうするかという話ではなく、自信と信用ある人間が図書委員として或る方針に沿って集書しなくてはいけないと確信しております。図書委員になって三年、いや四年でしょうか、十月末までに費消しないと他学部に流れてしまう書籍予算が毎年百五十万以上あることに気づき、十月末の丸々一週間、有名書店を回って「現物」を掻き集めました。たとえば上田秋成の『雨月物語』。日本語として国際日本学部に一冊あるべき。しかし当然、国文科には既存。すると重複チェックの結果、国際日本学部には入らない。ならば、留学生も多い学部だし、いっそ英訳本の『雨月物語』をとということになる。そして英語の本を入れ始めるとなると、今までほとんどゼロですから、これはもう際限がありません。そちらはそちらで何か何本か購入基準をいそいで立てないと……。

いろいろ、当然出発したばかりで貧寒を学生にとやかく言われて恥ずかしい思いばかりの国際日本学部ライブラリーですが、折角図書事務、カウ

ンターの方々とも親しくしていただけるようになった今、もう少しどうか、図書委員を、右のような勝手な作業も含めてやるためにもう四年いても悪くないかなとさえ思ったこともあるのです。最終的に移籍を決める上へ下へのタイミングに、この図書選定の苦しいけれど楽しくないこともない仕事のことを思いだせていれば、出て行くか、出て行かないか、どうしようもなく均衡してしまったバランスがどちらに振れたものなのでしょうか。運命とかハズミとか、つくづく面白いものだよね。皆さん、御機嫌よう！

知らず学魔一匹の寄贈書で  
勉強するかもしれないきみに